

幼児の自発的な音楽行動 ——幼稚園3才児クラスの観察による——

西海聡子

I はじめに

幼児は日常の生活や遊びのなかで、言葉に節をつけて話す、でたらめうたを歌う、聞こえてくる音楽に合わせて体を動かす、音の出るものをたたく等、自己の表現や表出として数多くの音楽的な行動を行っている。近年、これらの幼児期に特徴的にみられる自発的な音楽行動に研究の目が向けられ、幼児の豊かで自在な音楽行動の姿が次第に明らかになってきている。

鈴江(1986)は幼児の歌唱行動を社会性の発達との関連から論じ¹⁾、尾見(1994)は子どもが自発的に歌った歌を4つのタイプに分類するとともに、それらの音楽づくりの方略について考察している²⁾。藤田(1989)は、日本の子どもたちは、彼らの話す行為に深く根づいた、一定の表現形式に従って音楽づくりをしていることを明らかにした³⁾。そして、保育園や幼稚園における子どもたちの音楽行動の継続的な調査研究(1988~92, 94)を通して、話し言葉とも歌ともつかない中間の形式が圧倒的に数多く見られることを明らかにし、これらは音楽表現のための基本的な形式の習得に大きな役割を果たしていることを指摘している⁴⁾。

従来 of 保育においては、幼児が自ら行なってい

る音楽的な活動は見過ごされ、既成の音楽作品を幼児に与えることを中心とした音楽活動が行なわれてきた。なかには、音楽作品の完成度や技術の習得を重視した音楽の楽しさを忘れた指導も少なくなかったようである。

保育者は、歌を教えることや器楽合奏など既成の音楽作品を与えることのみを音楽活動としてとらえるのではなく、幼児の自発的な音楽行動にも目を向けそれらを音楽表現の萌芽ととらえ、幼児の音楽的発達をいかに援助していったらよいか、について考える必要があるだろう。そして、それにはまず子どもたちの音楽行動の実態を知ることが必要なのではないだろうか。

このような課題意識のもとに、筆者は修士論文⁵⁾において、実際の幼稚園での観察に基づいた子どもたちの自発的な音楽活動(自発的な音楽行動とは幼児が自ら持ち出した音楽活動を指す)の実態についての調査、分析を行なった。本研究は、この論文を基に新しいデータを加えて整理しなおすと共に、自発的な音楽行動の考察を深めてみたい。

II 調査の方法

園生活における自発的な音楽行動の実態を把握するために、幼稚園3才児クラスの観察調査を下記の2園において行なった。

(1)観察方法

①方法：ビデオカメラでの撮影と参与観察を基本

*〒380 長野市三輪8-49-7 長野県短期大学
*Nagano Prefectural College, 49-7 Miwa 8-chome, Nagano 380, Japan.

とした。具体的には、自発的な音楽活動を含む幼児の活動のすべてをビデオカメラで撮影し、撮影中に気づいたことは撮影後日誌に記述した。ビデオカメラは固定することなく、幼児の行動に合わせて保育室、廊下、園庭と自由に移動させ、幼児の行動を克明に記録するように努めた。観察者は幼児の自然な活動になるべく影響を与えないような位置から撮影することを心がけ、幼児の活動に対して共感的に接するが介入はしない態度で行なった。

- ②対象A：埼玉県秩父市 私立M幼稚園
- ・年少児（3～4才児）「りすぐみ」
幼児24名（男児12名女児12名）
 - ・期間 1992年9月～10月の6日間
 - ・保育時間内の自由遊びの場面を中心に
総観察時間14時間
- 対象B：埼玉県秩父市 私立K幼稚園
- ・年少児（3～4才児）「ひよこぐみ」
幼児28名（男児14名女児14名）
 - ・期間 1992年10月～11月の6日間

- ・登園時や降園時の自由遊びの場面を中心に総観察時間12時間

(2)分析方法

1. 音楽活動を日誌に記述

撮影したビデオの映像から幼児の音楽活動を拾いだし、音楽活動の部分を日誌に記述した。記述の方法は、ひとまとまりの音楽活動ごとに①音楽活動をした幼児の名前②音楽活動を音符を使っての時間的組織化（音高の動きも簡略的に記載）③言葉と身体との関係④音楽活動が生まれた状況など音楽活動の背景に関する簡単なコメント、の4つの観点から行なった。

2. 分類

はじめに、観察で得られた音楽活動をひとまとまりごとに、保育者が与えた音楽活動と幼児が自発的に持ち出した音楽活動に分類した。次に、活動の種類によって下記の6つに分類をした。

- a. 歌
 - a-1 既成曲の再現
 - a-2 即興的な歌
- b. 中間形式
 - b-1 伝承的唱えことば・

表1 幼稚園3才児クラスの観察で得られた音楽活動の種類と回数

活動の種類		M幼稚園年少児		K幼稚園年少児	
		保育者が与えた音楽活動	幼児が自発的に持ち出した音楽活動	幼児が自発的に持ち出した音楽活動	幼児が自発的に持ち出した音楽活動
歌	a-1 既成曲の再現	「とんぼのめがね」他 22	「かえるのうた」他 22		0
	a-2 即興的な歌	0	「たーんたたんたんたーん」7	「ちゃんちゃんちゃーん」他 7	7
中間形式	b-1 伝承的な唱えことば・わらべうた	「よーいドン」他 6	「いれて・いいよ」他 37	「いーけないんだ」他 50	50
	b-2 言葉をリズムカルに唱える	「とんとんまーえ」他 34	「おててうしろ」他 113	「これだーれの」他 56	56
その他	c-1 歌や言葉を伴わない音楽活動	0	リズムカルな足ぶみ 他 8	カスタネットと粘土 他 25	25
	c-2 合図の音楽・BGM	20	0	0	0
合計		82	187		138

- わらべうた
- b-2 言葉をリズムカルに唱える
- c. その他
 - c-1 歌や言葉を伴わない音楽的な活動
 - c-2 合図の音楽, BGM

歌う行動も見られた。

M幼稚園から22件の事例が得られたが、子どもたちはそれらの歌をどのように覚えたのだろうか。曲目より、保育者が教えたものが13件、年中・年長児が歌っているの聞いて覚えたもの2件、テレビからの影響と思われるものが7件あった。

III 結果と考察

観察で得られた音楽活動の事例は、M幼稚園総数269件、K幼稚園総数138件だった。

観察を通して得られた音楽活動の種類と回数を表にまとめた。(表1)

次に、自発的な音楽行動の特徴や音楽的な要素を分類別に具体的な事例をあげながら検討したい。

<a 歌>

観察で得られた音楽行動の事例の中から、言葉から離れて旋律とリズムを持ち、歌と認識できるものを分類した。

<a-1 既成曲の再現>

a-1は替え歌やヴァリエーションされているものも含み、既成曲の再現と考えられる事例をまとめた。歌の再現はほとんどが部分的であった。かたづけをしている時「おかたづけ」の歌を歌い出すように、状況に誘発されて歌う場合が多い。また、自分の好きなフレーズを何回も繰り返して

【事例1】「おかたづけの歌」

譜例1の「おかたづけ」の歌は、かたづけが始まると決まって誰かが歌いだす歌であった。子どもたちにとって「おかたづけ」の歌とかたづける行為は強く結びついているものようだ。

譜例2は、自由にブロックで遊んでいる場面で、そろそろかたづけの時間ということを感じたひろき君が「おかたづけ」を替え歌したものである。その時の気持ちに合わせての替え歌もよく子どもたちに見られるものである。オリジナルの歌の拍に乗り遅れることなく、終わりのことばを入れ替えて歌っている。

<a-2 即興的な歌>

即興的に歌われた事例は、M幼稚園で7件、K幼稚園で7件あった。どの事例も2フレーズ程度の短いものだった。即興的な歌の旋律に関してはそれぞれ個性的で共通点は見いだせないが、言葉に関しては擬音が意味のない単音が多かった。

【事例2】「たーんたたんたんたーん」【事例3】

【事例1】「おかたづけの歌」

おかたづけ

譜例1

♩ = 112

作詩・作曲者不詳
小林つや江 編曲

お か た づ け お か た づ け さ あ さ み な さ ん お か た づ け

譜例2

お か た づ け お か た づ け じ ゃ ない よ

表2 伝承的な唱え言葉・わらべうたの種類と回数

伝承的唱え言葉・わらべうた	M	K
いれて・いいよ	18	12
あーららこらら	3	12
だれかのだれかのおとしもの	0	11
いーちぬけた	0	2
いち、に、さん (数かぞえ)	3	0
よいしょよいしょ	5	1
わっしょいわっしょい	0	1
はっけよーい	2	0
ここまでおいで	0	2
ゆうびんやさんのおとしもの	1	0
かごめかごめ	0	4
ケンケンパ	0	1
もういいかい	1	1

M：M幼稚園 K：K幼稚園

面を見てみると、リズムカルな唱え言葉は、言葉の意味を伝えるということよりも、リズムカルな音の表現そのものを楽しんでいる様子がうかがえる。また、通常の言葉で表現するよりも唱え言葉による表現のほうがまわりの注目をひきやすいことを経験的に感じて使っているようであった。

伝統的な唱え言葉の事例として【事例4】「だれかのだれかの落としもの」をあげてみよう。

K幼稚園の子どもたちから、「だれかのだれかの落としもの」という昔からある‘ふれ言葉’についてのヴァリエーションを採取することができた。ここにあげたヴァリエーションはすべて拍節的なリズムに乗り遅れることなく軽やかに歌っていた。唱え言葉は、慣習的に言葉を拍節的にまとめて一定のリズムを作り出す機能を備えている。子どもたちは周囲とのやりとりを通して、言葉を拍節的にまとめる方法を学習し、単に模倣するばかりでなく、呼吸単位の拍節のなかでみごとなヴァリエーションを作っている。

<b-2 言葉をリズムカルに唱える>

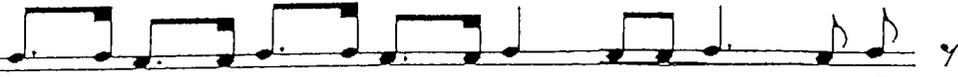
【事例4】「だれかのだれかの落としもの」

(6件) 

だ れ か の だ れ か の お と し も の

(2件) 

だ れ か に だ れ か に こ れ あ げ る

(2件) 

だ れ か に だ れ か に いー も の あー げ る
(くー れ る)

(1件) 

だ れ か に だ れ か に こ の は っ ぱ あー げ ない

【事例5】「今度はねんどにしようかなあー」

自由な遊びの場面で得られた事例である。ブロックで鉄砲作りをしていた女兒3名は、そろそろ飽きてきたようである。はじめにまいちゃんが「こんどは・ねんどに・しようか・なあー」と通常の話し言葉よりリズムにのせて拍節的に話しかけると、あいちゃんはまいちゃんが作り出したリズムと音高をそのまま模倣し、しかし語尾を少し変化させて「こんどは・ねんどに・しよう・ねえー」と応答した。二人のやりとりを聞いていためぐよちゃんは、2番目のあいちゃんが終わるのが待ちきれないかのように最後の部分を重ねて、前の二人の倍の速さで「こんどはねんどに・しましゅー」と続けた。

リズムカルな言葉はどのように生まれるのだろうか。まいちゃんの表現から考えてみよう。「こんどはねんどにしようかなあ」という一呼吸の時間単位の中で、言葉のまとまりに従って「こんどはねんどに」と「しようかなあ」に等分割し、更に、音節のまとまりに従って、「こんどは・ねんどに・しようか・なあー」と下位分割した結果、拍節的に唱えられていることがわかる。

次に、唱え言葉や唱え歌の性質について「拍節

の時間単位は、いったん定まると持続する傾向が生じ、子どもたちは反復する拍節にのって、声のニュアンスやリズムを変え、言葉を入れ替えて唱える変化を楽しむ」と指摘されているが、まいちゃんに続いて表現したあいちゃんともめぐよちゃんの表現によって確認することができる。

まいちゃんが作り出した拍節の時間単位をあいちゃんは受け継ぎ、まいちゃんと同じように下位分割をしながら「こんどは・ねんどに・しよう・ねえー」と語尾を変形させて応答する。はじめに作り出された拍節の時間単位は、あいちゃんの模倣によって安定し、その流れに乗ってめぐよちゃんは「こんどはねんどに・しましゅー」と今までの半分の時間でたたみかけるように表現した。

このように子どもたちは、一呼吸の時間単位のなかで、言葉を拍節的にまとめ、反復の過程で言葉の入れ替え等を楽しみながら音楽的な唱え言葉や唱え歌を表現を作り出しているといえる。

【事例6】「正義の味方」

リズムカルに話される言葉は、動きを伴っていることが多い。リズムカルな言葉に伴ってみられる動作には、歩く、走る、ポーズをとる、何物かになりきる、などがあつた。特に男児は、怪獣や

【事例5】「今度はねんどにしようかなあー」

【事例6】「正義の味方」

テレビのアニメーションに出てくる正義の味方や悪者になりきったごっこあそびのなかで、多くのリズムカルな言葉を生み出していた。武器の音や自分の動作を象徴的な擬音や意味のない言葉によって表現していた。また、リズムカルな言葉と体の動きは一致している場合が多い。

IV おわりに

幼稚園3才児クラスの観察を通して、大きく3つのことが得られた。

1、幼児は園生活の中で、即興的に歌を作り出して歌ったり、話し言葉と歌の中間に位置する唱えことばや唱え歌を周囲の先生や友達との相互のかかわりを通して音楽的な表現を作り出し、自発的に豊かな音楽行動を行っていた。

2、自発的な音楽活動は、生活や遊びに溶けこんでいて、活動のおこる要因や内容は生活や遊びの文脈と深い関係が読み取れる。

3、自発的な音楽行動とはいっても、全くの無から子どもたちは音楽を生み出した訳ではない。周囲から与えられ、また自分から求めて得たそれまでの音楽的経験や、聴覚を通して蓄積された音環境からの作用を取り込み、子どもたちは音楽づくりをしていた。

これまでの考察において、子どもたちは保育者が設定した音楽活動以外の場、つまり、生活や遊びの場において自由に自在に自発的に音楽行動を行なっていることを確認してきた。

久富(1993)もまた、藤田の考えに基づいて5歳児が手合わせ遊び「アルプス一万尺」で遊んでいる姿を、子どもたち相互の学び合いの視点から事例を分析し、子どもたちは遊びを通して、主体的に、音楽的に、感じ合い、学び合い、新たな音楽づくりを行なっていることを明らかにしている⁸⁾。

遊びは、子どもたちの主体性が最大に生かされる場であり、そこでの自発的な幼児の音楽行動に

ついて保育者は理解し、尊重することが重要である。そして共に、自発的な活動が生成する幼児の遊びを空間的に時間的に保障することが必要であろう。

謝辞：本研究をまとめるにあたり、調査にご理解とご協力を賜りました緑ヶ丘幼稚園、並びにこぼと幼稚園の園長先生はじめ先生方に心から御礼申し上げます。また、未熟な私をご指導下さいました国立音楽大学の藤田芙美子先生に深謝いたします。最後に、本学川井明男教授、小木曾敏子教授に厚く御礼申し上げます。

引用文献

- 1) 鈴江輝美：「幼児の集団における歌唱行動の研究」『音楽教育学』第16号 1986 pp. 28-39
- 2) Atsuko Omi: 'Children's spontaneous singing-Four song types and their musical devices-' "Journal of Kawamura Gakuen Woman's Univ." Vol. 5 No. 2 1994 pp. 61-76
- 3) Fumiko Fujita: "Problems of language, culture and the appropriateness of musical expression in Japanese children's performance" Tokyo, Academia Music 1989
- 4) 藤田芙美子：「幼稚園における様式化された話し言葉」他『日本保育学会研究論文集』1988-92, 94年
- 5) 西海聡子：「幼児の自発的な音楽行動—保育における新たな音楽活動をめざして—」武蔵野音楽大学修士論文1993年3月
- 6) Fumiko Fujita: Ibid. pp. 217-227
- 7) 藤田芙美子：「幼児の発達と表現—音楽表現」『講座幼児の生活と教育第4巻—理解と表現の発達』岩波書店 1994 p. 183
- 8) 久富さよ子：「5歳児の手合わせ遊び「アルプス一万尺」の学び合いの過程—歌と動作の関係—」『保母養成研究』第11号 1993 pp. 59-66

付記：本稿は岡山大学で開催された日本音楽教育学会第24回大会（1993年10月9日）において口頭発表した内容を中心に加筆しまとめたものである。